

再任用・再雇用職員・非常勤教員部ニュース

No. 307
2018.2.10

東京都公立学校教職員組合（東京教組）
再任用・再雇用職員・非常勤教員部
〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋 2-6-2 2F
TEL. 03-5276-1311 FAX. 03-5276-1312

東京都の次年度教育予算が決定されるも、 英語専科の配置は、たったの35人！

東京都は、1月26日に来年度（2018年度）予算の概要を発表しました。それによれば、教育関係予算は、1.1%（9億円）増の8183億円となっています。学校現場を支える教職員定数については、文科省の「教職員定数改善計画」が実現しない中、小学校の児童数増に伴い213人の増員となりました。しかし、新学習指導要領で「教科」となる「英語」について、英語専科の配置は、全都でたったの35人に留まっています。これでは、23区26市だけでも1地区あたり1人にも満たないこととなります。区市町村教育委員会によっては、次年度文科省が求めている15時間増を越えてまで、英語の実施を強要しているところもあります。英語指導のための条件が全く整備されていないにもかかわらず、しかも、学校現場における長時間労働が社会問題となっている中で、さらなる負担をかけることが許されてよいのでしょうか？しっかりと現場の声をあげていきましょう。

「はれのひ」事件に思うこと

先月の成人式の日、参加予定者の予約した振袖が届かない・着付けができないという事件が報道されました。予約を受け付けていた「はれのひ」という会社が、立ち行かなくなっていたにもかかわらず、予約を受け付けていたことが原因とされました。親としては、「わが娘の晴れの日は何たること」と思い、本人もショックを受けて当然とは思っているものの、自分が二十歳を迎えた当時、行政主催の「成人式」への参加を露ほども思わなかった自分としては、「違和感」しかありません。そもそも、「成人式」なのに、「親がかりで着飾る」ことに矛盾を感じないのでしょうか？と言ったことを考えていたら、私たちの現場でも、気がかりなことに気が付きました。ここ数年（いや、もっと前からかもしれませんが）小学校の卒業式で、卒業生の担任の衣装が華美になり過ぎているのではないかということです。私がまだ、若かったころは、卒業式を前に保護者にも、「服装は、華美にならないように」とお願いしたものですし、せいぜい、ダークスーツを着るくらいだと記憶しています。ところが、近年、男性教員（それも若い教員）が、羽織袴で卒業式に臨むことが珍しくないようです。格差が拡大している中で、私たちの姿勢も問われると思うのですが、いかがでしょうか。

都教委要請に向けて、ご意見をお寄せください。

再任用・再雇用・非常勤教員部では、部員からのアンケートをもとに、毎年3月下旬に都教委要請を行っています。常任委員会として、今年度の「要請書（案）」を作成しました。ご一読の上、追加すべき項目などご意見をお寄せください。宛先は、東京教組再任用・再雇用・非常勤教員部まで、E-mailまたは、FAXでお願いします。締切は今月末です。
FAX 番号 03-5276-1312 E-mail アドレス ttu@tokyokyouso.org

再任用職員、再雇用職員・非常勤教員にかかわる要請書（案）

日頃より東京都の教育の発展と教育諸条件整備のために努力されていることに敬意を表します。

さて、年金支給年齢の段階的引き上げにともなう高齢者雇用について、採用希望者のうち無年金者は原則全員採用化されました。しかし年金支給開始年齢に達した再任用者では、次年度継続を希望した人々への採用拒否という事例が複数、職場から報告されています。生活できる収入を確保できない等々しき問題です。関係機関においての十分な配慮をお願いするところです。

東京都において若年採用者の増加に伴い、私たち再任用・再雇用職員・非常勤教員の職場にしめる位置づけもますます重要となっています。職場からあがってきている真摯な思いを受け止めていただき、下記の項目について検討、改善されますよう要請いたします。

記

継続雇用全体を通して

1. 採用選考基準を明確化するとともに、校種別希望者数・採用者数・合格率などを公開し、合否や配置校の変更などについて、透明性と納得性を高めること。
2. 制度全体について、管理職が十分理解していない事例がみられる。勤務条件などについて管理職を指導すること。また、持ち時数・担当教科等の決定にあたっては、当該職員と十分な協議と納得の上決定する様、校長を指導すること。

再任用職員関係

1. 採用希望者を全員採用すること。特に再任用短時間勤務については、希望者の意向を尊重すること。
2. 再任用フルタイム勤務職員が担任をする場合、体育や宿泊的行事への参加は軽減すること。

再雇用職員、非常勤教員関係

1. 採用希望者を全員採用すること。
2. 再雇用嘱託員、非常勤教員の短期の介護休暇制度を有給化すること。
3. 小学校再雇用職員及び非常勤教員の授業持ち時間数は、中学校の規定を準用するなど過重負担とならないようにすること。
4. 再雇用職員、非常勤教員の職務は「教員」としての本務である「教科指導」「児童生徒指導」を

基本とすること。授業以外の校務分掌は、担当教科等に付随するものとし、過重な負担をさせないこと。また、再雇用職員・非常勤教員に対する「その他校長が命じる業務」「副校長の補佐業務」については、本人の経験や希望が生かされるよう、十分なコミュニケーションを経て決定するよう、校長を指導すること。

5. 再雇用職員、非常勤教員制度について次の点を改善すること。

- (1) 一時金並びに諸手当を支給すること。
- (2) 高齢者であり、相応の配慮が求められることを考慮し、過度に、補教（出張者や休暇取得者の授業の代替業務）をさせないこと。また、プール指導の補助等については、健康上の配慮をすること。

寄稿

韓国フィールドワーク その2

元部長 城田 純生

3/15 烈士博物館前 筆者は後列左1人目



11月11日

3. 15 烈士博物館の見学に行く。李承晩政権を打倒する民主化運動の発祥の地だそう。民衆の闘いと警察権力の苛烈な弾圧をジオラマで表現するなど、館内はハングルが読めない私でもよく分かる構成になっていた。馬山市内を見下ろすこの山の上にこのような立派な国立の施設が作られ、学生や民衆の闘いの記憶や記録をちゃんと保存する施設が建てられているのには感動を覚えた。

昼食後、大型バスに乗り換え、星州（ソンジユ）に向かう。到着後バスから降りて視界に入ってきたのは、バスの近くに壊されたテントの残骸だ。サード配備反対のソンジユの住民が拠り所として闘っていたテントだ。支援も含めて 500 人の人々

守っていたのだが 8000 人の警官隊が襲って破壊したそう。そのテントを破壊されたままの状態ですべて保存しようという住民の強い意思が伝わってくる。そこから、少し歩いた古民家で、この地域の闘いの中心になっているリーダーの話聞く。また住民の闘いの中には円仏教という宗教集団があることが分かった。

破壊されたままのテント



次に幟旗や横断幕が道路の両側に延々と続く舗装された街道を歩いた。まるで沖縄の高江や辺野古に来たのではないかと錯覚させる。この道を 30 分近く左右の横断幕を見ながら上っていくと、道路上に白い真新しいテントが見えてきた。

このテントで、サードの施設で使うガソリンを運び込ませないようにと、トラックの侵入をテントを張って阻止しているのだという。24 時間休みなく交代で監視しているの

だという。私たちが訪ねて行ったときは男性が一人でこのテントを守っていた。経産省前の脱原発テントのようであった。山の中をたった一人でテント当番とはなみなみならぬ意気込みを感じた。

バスに戻り、ソウルに向かう。ソウルに近づくと高速道路が大渋滞で、到着が大幅に遅れてしまった。今日の宿はホテル・ジョーカーだ。ホテルに荷物を置き、身軽になって急いでロビーに集合した。

みんなで一緒に地下鉄に乗りヨンピョンから汝矣島（ヨイド）に向かう。汝矣島では労働者集会の前夜祭をやっているようだ。何度目か乗る地下鉄であるが、駅の表示は殆どハングルで右に行くのか左に行くのか読めないし理解できない。このことが、韓国に来て強く感じた事である。情報はあるのだが自分の頭で理解できないのはもの凄いストレスになるものだと思った。もし1人でやって来たらとか、迷子になったらとか想像するとぞっとする。そんなことを考えながら汝矣島に着く。

駅を降りてしばらく行き、食堂で夕飯をすませた。食事中に会場から聞こえてくる大合唱の声、期待でワクワクしてくる。しかし、食べ終わって会場に向かうと前夜祭はすでに終わっていて、後片付けをしていた。それでも会場内に残った出店の様やあちこちで余韻に浸っている労働者の集団を見て回った。帰りも地下鉄に乗りヨンピョン駅に向かう。前夜祭が不発に終わったのでホテル近くで飲みなおすことにした。「おでん」と張り紙がしてあった店に入り、ビールや韓国の焼酎を飲む。つまみはチジミだ。少しだけ酔いが回ってきたところで宿に戻った。

11月12日

7時に起きてみんなで朝食に出かける。24時間営業の現場労働者用の食堂である。唐辛子のきいた辛い味の朝食であった。身体が熱く火照ってくる。宿に戻り、身支度を整えて出発だ。

午前中は仁川（インチョン）にある仁川の民主労総本部訪問である。労働組合運動で命を落とした労働者たちを烈士として称え、彼らの遺影で壁面を飾っている「烈士の部屋」で説明を受ける。迫田さんの名通訳があったので中身は良くわかった。また、現在は執行部の選挙期間中であることも紹介された。

その後、プピョン公園にある日帝強占期徴用労働者像〈解放の予感〉の見学に行く。広く整備された公園にレリーフと人物像が立っている。この場所はアジア太平洋戦争の頃、三菱製鋼仁川製作所があったところだ。1938年の国家総動員法制定以降、日帝が動員した朝鮮人は延べ800万人に達するそうだ。朝鮮人は青年はもちろん、子ども、学生、女性、老人など年齢や性別に関係なく動員され、帝国日本の領域で労務者、軍人、軍務員、慰安婦などの生活を強要された。そんな過去の歴史的な一つ一つの事実について知ったつもりでいた自分が恥ずかしい。

昼食後、地下鉄に乗り労働者集会の会場であるソウル市の市庁舎へと向かう。去年の集会では、キャンドルデモとも重なって120万人の人々が集まったそうだ。その勢いで朴槿恵を弾劾するところまで追い込んだのだ。今年は一切、何人が集まるのだろうか。

地下鉄から降りて駅の構内を歩いていたら、長い男性の行列ができていた。どうやら、トイレの行列のようである。日本では女性のトイレに行列ができることはあるが、男性の行列を見るのは珍しい。きっと、韓国では女性用のトイレは沢山あって、男性用は少ないのかもしれない？とか、集会の参加者は男性が圧倒的に多いのでは？いろいろ考えてみた。

地下鉄の出口から出るとそこがソウル市の市庁舎で大きな広場になっていた。そこが会場で、既に大勢の人々が中央の演壇に向かって座っていた。小さなマットを敷いている人や、貰ったチラシを下にして座っている人など様々だ。数万の人々がこの集會に結集している。会場後方には各団体の大きな旗が幾つも風に吹かれて揺れている。

中央の演題では何か訴えているが、言葉はわからない。迫田さんが通訳してくれるのだが周りの喧騒と入り混じって良くわからない。しかし、集會が始まるのは何となく雰囲気分かった。集會の開始は「君のための行進曲」の合唱から始まった。数万の人々が歌うこの曲、原語では歌えないけど、手を振り足でリズムを取りなら私も参加していた。

各争議団からの決意表明があり、歌あり、踊りありで集會は進んでいった。集會終了後デモに出発だ。数万人のデモで、しかも私たちの集団は最後尾につくということなので、かなり待たされた。日本の労働組合の旗も見える。JR総連や動労千葉の人たちも参加しているようだ。デモに出発して驚いたのは大きな道路の両側の車線一杯に広がってデモ行進が行われていることだ。韓国ではよくある風景の路上駐車が1台もない。デモ隊を規制する警察官の姿もない。勿論、車も走ってこない。こんなデモは初めての経験だ。しかし、これが本当のデモ行進であろうとも思った。

ソウル市庁舎前広場での大集會



以下次号に続く

2018, 1, 30 日暮里サニーホール

あたりまえの政治を取り戻す1・30シンポジウム報告

シンポジスト 前川 喜平 望月 衣塑子 寺脇 研

前部長 水谷 辰夫



1月30日(火)日暮里駅近くのサニーホールへ出かけていきました。「安政法制と立憲主義の回復を求める市民連合」主催、「総がかり行動」協賛の集會です。シンポジストは標記の3名。その顔ぶれから、会場定員400名と聞いて、「これは大変！」と早めに行ったのが正解でした。公式の開場時間18時前には、もう満席でした。参加者数は、ロビーでの待機者を含め600名ほどにもなったようでした。

シンポジウムの始まりは、法政大学教授の山口二郎さんの次のようなあいさつの言葉でした。「今年は、『改憲』発議がなされようとしている。あらゆる手段で、「改憲発議」を止めさせなければならない。あたりまえの政治を取り戻すための行動をしよう。」と呼びかけました。

続いて3人のシンポジストから、それぞれの問題提起がありました。

初めに前川喜平さんは、今の政治の状況を「権力の腐敗と権力の暴走—後ろ向きの暴走と言える」

と断言しました。そして、文科省在任中に経験した「加計学園問題の不公正な政治の在り方」を語り「権力の腐敗」の現状を憂いました。そして「安倍政治の暴走」については、「教育改革」における「道徳の教科化」を例に、痛烈な批判を展開していきました。

前川さんは言います。「道徳の教科化」の最大の問題点は「個人の尊厳をないがしろにしていることです。…社会の一員という広がりがないが国家までとまってしまう、地球市民とか人類とか世界という広い視野がない。…個とか地球を欠いた『道徳教育』であり、日本国憲法の価値からも大幅に逸脱している」と。「国家主義」の道徳教育を進める安倍政権の教育行政にトップとして携わった人の怒りがにじみ出た発言でした。

続いての発言は、東京新聞の記者の望月衣塑子さんでした。菅官房長官への記者会見での質疑で、我々が知りたいことを追及していく姿を「喝采」の気持ちをこめて見ている人々がたくさんいることでしょう。そんな追及していく原点となる自らの姿勢と今の「ゆがめられた報道」について語ってくれました。

政治に対する報道の在り方をこうのべていました。

「戦争を遂行できる力を持つ政治に対して、私たちメディアがどういう立ち位置で立っていないか、そして国民にとってどういう情報を伝え、何よりも戦争を防ぐために何をやらなければならないのか、第一に考える報道を」と…。

3人目の寺脇研さんは、いわゆる「ゆとり教育」を進めてきた文科省の元審議官です。その寺脇さんは、現在の状況を「あたりまえのことが出来なくなっている、あたりまえのことが言えなくなっているとんでもない時代」とユーモアを交えながら話を進めていきました。

道徳教科書採択を例に「いままでだったら、市民一人一人が言わなくても役人がちゃんと(わかまえて)おさえているでしょう、国会議員もそんな無茶苦茶なことはせんでしょう、という前提であったそういう社会であったのです。しかし、大きくそこが変えられてしまったのが、今の安倍政権だととらえ、このことのおかしさを感じる事ができる世代の市民が、しっかりと行動していくことが必要である」と寺脇さんは語りました。

2時間を超える話の中に、憤り、ユーモア、真実への思いなど、たくさん感じました。参加者の拍手や声にも、発言者が即座に反応するという一体感のある集会でした。

最後のあいさつに登場した学習院大学教授佐藤学さんは、今の日本は「安倍政権になってから、立憲主義が壊されてしまった。日本国憲法が無視されてしまっている。国家のため、国家のためとおっしゃっていますが、安倍政権こそ国家を腐らせている」と厳しく非難しました。そして、「ユーモアのそこには悲しみがある。」というマーク・トウェインのことばを引き、集会で出た数かずの笑いをたたえて「ユーモアの根っこには怒りがある、憤りがある。まっとうな声をまっとうに響かせよう。」と結び、集会を終えました。

私たちは、今年1年本当に厳しい状況にさらされていくことになりそうです。憲法「改正」発議という最悪のシナリオを許すわけにはいきません。何としてでも、安倍「改憲」を阻止する動きを作り上げていくことが大切です。